

審査の結果の要旨

論文提出者氏名： 富山 由紀子

富山由紀子氏の博士論文「コンポラ写真：日本写真史における「日常」、1970年前後を中心に」は、1960年代後半から70年代前半にかけて日本の写真界に生じた「コンポラ写真」と呼ばれる表現を主題とし、それが誕生するにいたった歴史的背景から、流行化する経緯、のちの時代における評価や影響までを包括的に論じた写真史研究である。富山氏は、カメラ雑誌をはじめとする数多くの一次資料にもとづく作品および批評的言説の分析を通じ、コンポラ写真の特徴をなす「日常」の表現が有していた多様性を如実に浮かび上がらせている。

本論文は序章と終章を含め全八章からなる。序章では、「コンテンポラリー写真」の略称である「コンポラ写真」という概念成立の経緯や写真史研究におけるその位置づけが概観される。この呼称は雑誌『カメラ毎日』1968年6月号の特集「日常の情景」において、写真家・大辻清司によりはじめて用いられた。それは日本の若い世代を中心に流行しつつあった写真の潮流が、1966年のニューヨークにおける展覧会「Contemporary Photographers: Toward a Social Landscape」の写真群と共通する特徴を備えていたことに由来する。

第一章「コンポラ写真の登場と多様化」では、コンポラ写真をめぐる『カメラ毎日』をはじめとする同時代の言説の分析が行なわれる。その主要な担い手は大辻や重森弘淹、堀内誠一、草森紳一、福田定良、そして、『カメラ毎日』の編集者・山岸章二であった。コンポラ写真登場の背景としては当時、報道写真の行き詰まりや広告写真に代表されるコマーシャルイズムへの批判といった要因が語られた。コンポラ写真の特徴とされた日常性はこの時代において、写真のみならず、美術や文学のほか、思想・政治においてもキーワードとなっていた。富山氏は、こうした文化的なネットワークを細かにたどり、コンポラ写真に対する否定と肯定に二分化した評価をはじめとする言説状況の錯綜のなかに、明確な中心や輪郭をもたないがゆえに幅広く流通し多様化していたコンポラ写真の変容過程を描き出していく。

富山氏は続けて、コンポラ写真の具体的な作品分析に取り組むため、そこに通底する二つの大きなモチーフである「アメリカ」と「地域」に着目する。第二章「コンポラ写真と「アメリカ」」で重点的に扱われるのは、大辻がコンポラ写真の先駆的な撮影者のひとりとした下津隆之の「沖縄島」、「天気晴朗：川崎市にて」、「二月（雪の朝）」の三作品である。富山氏は下津の写真の細部に隠されている、アメリカ軍基地や戦争の記憶をめぐるメッセージを丹念に読み取ることを通じて、日常のなかでは不可視化されているアメリカと日本社会との関係性を、けっして顕在的ではなく、あくまで秘かに示唆しようとする、コンポラ写真特有の表現構造を析出している。

第三章「コンポラ写真と「地域」」で焦点となるのは、「ディスカバー・ジャパン」のキャンペーンなどを背景とする「地域」への関心である。富山氏は秋山亮二の「旅ゆけば……春」と森裕貴が京都をモチーフに撮影した作品群を取り上げ、前者のうちに「観光客としての写真家」の実践による日常の表現を、後者には、故郷との私的な関係性を写真にあえて反映させることを通じ、固定化された京都のイメージを裏切ろうとする手法を認めている。これらはいずれも、「観光客」という視点や写真家の「私性」を自覚的に活用し、写真の「作者」のあり方を問い直した作品群と位置づけられる。

第四章「揺らぐ「日常」、揺らぐ「作者」」は、コンポラ写真固有の日常性に対する批判や既存の写真家像からの離脱を、この潮流の源流と見なされた木村伊兵衛らの作品との比較のほか、阿部昭の小説における日常表現を参照して論じている。源流探しの言説は、コンポラ写真を複数の時代に存在しうる撮影手法ととらえる視座を開く一方で、それぞれの時代における日常性の差異を無視しかねないものでもあった。富山氏は、コンポラ写真が示す 1970 年前後固有の傾向として、匿名性や集団性へと向かう「作者」の変容を指摘し、同様の事態を阿部の『日日の友』（1970 年）という文学作品のうちに読み取っている。

第五章「コンポラ写真のゆくえ」は、コンポラ写真の流行が退潮を迎えた 1970 年代後半に舞台を移し、『カメラ毎日』の投稿写真コーナーである「アルバム」のほか、ギャラリーや印刷物といった写真家たち自身による自主的なメディアにおける写真表現のうちに、コンポラ写真を継承する動向を見出していく。「アルバム」はコンポラ写真がもたらした作者の揺らぎを受け継ぐ一方で、そこにあった私性を活用した批判性を失い、単なる自己肯定に近づいてしまった、と富山氏は言う。一方、自主メディアの活動のなかで、コンポラ写真における日常性批判は「見ること」をめぐる制度の批判へと変化していった。

第六章「コンポラ写真の再評価」では、1980 年代以降、批評家・飯沢耕太郎らによって展開されたコンポラ写真論が検討される。とくに牛腸茂雄の写真集『SELF AND OTHERS』（1977 年）をコンポラ写真の最たる成果とする飯沢の影響をもった主張は、富山氏によるこの写真集自体の詳細な考察を通して相対化され、飯沢が見落としている牛腸作品における時代状況への目配せにこそ、本論文が注目する日常性批判としての写真というコンポラ写真の特性が表われていたことが明らかにされる。富山氏はさらに、1990 年代以降の写真がコンポラ写真と関連づけて批評される言説状況を通して、コンポラ写真が有するアクチュアリティを論じ、1960 年代末から関口正夫の作品に一貫して存在するスタイルのうちに、2000 年代にいたるまで継続されたコンポラ写真の実践を見ている。

終章「コンポラ写真という選択肢」は、時事的な問題や歴史への言及を写真のうちに秘かに埋め込むコンポラ写真の特徴を、写真による日常性批判のための選択肢ととらえ、こうした性格をもつコンポラ写真は、写真を見る者の姿勢に変容を迫り、写真史の読み直しを促すものである、と論じている。

審査会では一致して、コンポラ写真をめぐる批評を徹底した調査によって網羅的に渉猟したうえで、このとらえにくい主題に関する言説の分析を周到に遂行した点とともに、埋もれた写真作品を発掘し、その同時代的な背景を明らかにした丁寧な読解に加え、個々の写真イメージの機微に触れる繊細な文体もまた、きわめて高く評価された。審査員からは、結論にあたる終章が短く、コンポラ写真とは何であるかという総括が必ずしも十分とは言えないこと、作品分析における細部の解釈に恣意的な部分が残ること、主要な情報源である『カメラ毎日』の紙面構成や編集体制などに関する情報の不足、補助線とされた文学作品の妥当性などに関する指摘のほか、コンポラ写真を通して浮かび上がる差別の問題など、今後展開されるべき将来的課題が提起された。しかし、これらの指摘は、本論文があらたな知見に満ちたものであるがゆえに導かれたものであり、本論文の学術的価値を損なうものではないことも確認された。

以上により、本審査委員会は全委員一致で、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。